

歴史から現在へ—— 古矢旬著『ブッシュからオバマへ——アメリカ変革のゆくえ』

(岩波書店、2009年)

内 山 融

2008年アメリカ大統領選におけるバラク・オバマの勝利はまさに時代を画する出来事であった。同国憲政史上初めてアフリカ系の大統領が誕生したのである。このオバマ政権誕生の背景やその歴史的意義について理解するためには、ブッシュ（息子）政権成立以降のアメリカ政治外交の展開を深く知ることが不可欠である。アメリカ政治外交史の第一人者たる著者が折に触れて発表してきた時論を集成した本書は、最適な案内役といえよう。

第Ⅰ章「9・11後のアメリカ」には、ブッシュ政権成立からイラク戦争前までに発表された論考が収められている。2001年9月の同時多発テロは全世界を震撼させたが、この事件の直後に執筆された文章は、事件の背景にテロリズムと報復との悪循環やアメリカの単独主義的対外行動があることを指摘している。アメリカ史の文脈における9・11事件の位置づけという点では、この事件からアメリカ政治外交の特質が浮かび上がることが示される。すなわち、アメリカは世界に対して働きかける主体であり世界は客体であるという意識が伝統的にあり、この主体意識が傷つけられたことが9・11に対する過剰ともいえる反応を生んだこと、アメリカ外交には共産主義対アメリカ、テロリズム対反テロリズムといった善悪二元論が一貫していること、アメリカとデモクラシーを同一視する考え方がアメリカのデモクラシーを相対化する視点を喪失させていることなどが指摘されている。

アフガニスタンへの攻撃を開始したアメリカはあっという間に同国を制圧した。これについて著者は、軍事力による制圧が反米感情の亢進をもたらすという悪循環が存在するために武力制圧には限界があることを指摘する。強大な軍事力を背景とした単独行動主義に関しては、現代の国際政治では、アメリカ極集中的体制の出現と既存安全保障システムのほころびという形で秩序化と無秩序化が同時進行しているという。

第Ⅱ章「イラク戦争」は、2003年3月に開戦したイラク戦争についての論考がまとめられている。この戦争に象徴されるアメリカの好戦的な単独行動主義（ユニラテラリズム）は、冷戦の終焉とソ連の崩壊を契機として出現したという。イラクは程なく制圧されたが、これを受け、力による民主化には大きな困難が横たわっているであろうこと、自由を他から与えることは強制につながるという逆説が、アメリカの支配に対する新たな解放闘争を生み出すであろうことが指摘されている。

単独行動主義を支えたのはネオコン（新保守主義）の思想であるが、著者によれば、この思想はアメリカの歴史と伝統の中で培われてきた世界観、すなわち、自らを腐敗した世界の改革者とみなす自己意識に根を持つ。より直接的には、この思想はヴェトナム戦争の敗北という経験を癒す言説に端を発する。また、イラク占領を考える上ではアメリカの占領経験を見ることが参考となるという観点から、アメリカの大陸発展の歴史は先住民に対する占領地の拡大であったこと、黒人解放を掲げた南北戦争後の北部による南部支配は現

在のイラク占領と並行に捉えられること、米西戦争後のフィリピン占領も、遅れた民族を優越民族が支配することを正当化する点でイラク支配と共通性を有することなどが指摘される。

第Ⅲ章「漂流するブッシュ政権」は、2004年の大統領選挙から06年の中間選挙までを扱っている。ブッシュ再選の意義について著者は、アメリカと世界との分断、アメリカ国内世論の分断を強調したことを挙げている。各国の世論は敗れたケリー候補に好意的であったし、国内社会には特に文化的・宗教的争点をめぐって大きな亀裂があるというのである。第2期ブッシュ政権が直面する課題としては、同政権の諸政策に世論の支持は必ずしも得られていないこと、特にイラク問題は限界に近づいていることが指摘された上で、ブッシュの対外政策が遠からず変化を強いられるであろうという見通しが語られている。また、現在のアメリカ社会ではアイデンティティをめぐる亀裂が深刻である一方、アメリカ社会の持つ復元力は国民としての一体性を回復する流れを生み出す可能性が指摘されている。2006年中間選挙における民主党勝利に際しては、アメリカ政治の基調は大きく変わったとは見られないこと、格差是正などを目指す経済的ポピュリズムが台頭しつつあること、現実主義的外交が復活しつつあることなどが指摘される。

第Ⅳ章「オバマ大統領への道」は、2008年の大統領選挙をめぐる論考が収められている。アイオワ州での党員集会を皮切りとして同年の大統領選がスタートしたが、これを受け、対外政策や経済政策の諸課題をめぐる変化の兆候が見て取れること、民衆の反ワシントン感情が影響力を増してきていることが指摘されている。予備選挙の過程では、この大統領選の歴史的意味として、レーガン以降の共和党政権を支えてきた保守連合の分裂が共和党候補に苦境をもたらしていること、久しく保守派が握っていた連邦政治でのアジェンダ設定の主導権を民主党が奪還しつつあることなどが浮かび上がってきたという。

夏には民主・共和両党の正副大統領候補が決定した。民主党予備選におけるオバマの勝因として、彼が様々なアイデンティティをうまく使い分け、自らが特定の集団に強く結びつけられることを回避した点が挙げられている。ただし彼への一本化以降、党内融和のために党派性を表に出さざるを得なくなるというディレンマが生じたという。共和党については、マケインが選ばれたのはブッシュの後継イメージを持たない「離れ牛」(maverick)だったためであること、ペイリンが党内右派の支持を引き付ける役割を果たしていることが指摘されている。11月の本選挙におけるオバマの勝利に際しては、グローバル化の中で複雑化した諸問題への対処とアメリカの国際的威信の回復が新政権の課題であることに加え、彼に対する国民と世界の過剰期待が新政権への最大の脅威となりうることが示されている。

第Ⅴ章「オバマ政権の課題」に収められているのは、オバマの大統領就任後に書かれた文章である。著者はまず、オバマ政権の誕生が示すのはアメリカ政治における幾重もの変化であると指摘する。すなわち、連邦政党制における民主党の優位が決定づけられたこと、共和党内に路線選択をめぐる内紛の危機が生じていること、マイノリティや若者の政治参加の拡大という人口動態的变化を背景として民主党支持の新しい多数派連合が形成されている可能性があること、オバマの持つ複合的アイデンティティは若い世代の新しい人種意識と共鳴していると思われることなどである。また、初のアフリカ系大統領として、社会的多様性と政治的統一を両立させる多元的統合への展望を示したという点で、オバマ

大統領がアメリカ政治を再構築したといえる可能性を指摘している。

政権発足後数ヶ月経った時点において、著者はオバマが掲げる「変化」への見通しを語っている。経済的には新自由主義体制の崩壊が明らかになったものの、新たな政策体系を打ち立てる上では困難が伴うであろうこと、外交面では地球温暖化対策、中東政策、対ロシア政策などで一定の成果を上げているものの、アフガン、イラクという二つの戦争からの脱却は容易ではないことから、真の「変化」への道のりは遠いという。

終章『『変革の大統領』とアメリカの危機』は書き下ろしであり、変革を目指すオバマの前に立ちふさがるアメリカ政治の構造的宿弊を指摘している。対外関係については、軍産複合体が既得権益のネットワークとなり改革を阻んでいること、度重なる対外介入のために途上国におけるアメリカ不信が根深いことが挙げられる。経済に関しては、金融・経済危機が深刻化する一方で、市場の統制を目指すオバマの政策方針は共和党や企業からの執拗な抵抗に直面している上に、消費重視のアメリカ的生活様式を克服するという難しい課題があるという。政党政治については、共和党右派と民主党リベラル派の熾烈な党派的対立に加え、建設的な政治的討議の欠如が民主政治の空洞化を招いていることが指摘される。最後に、オバマ政権の登場と密接に関わる文明史的な変容は日本政治に対しても一定の意義を持つことが示唆されて、本書は閉じられている。

このように本書は様々な機会に執筆された数多くの論考が所収されているが、それらの論考に一貫しているのは、(著者もあとがきで述べているように) その時々 の出来事を歴史的文脈の中に位置づけてその意味を確認するという作業である。いずれも一般読者向けに書かれたものであり、アメリカ政治の専門家ではない者でも一連の事件が持つ背景と意味について十分に理解することを可能としている。その一方で本書が示す現代アメリカへの透徹した視点は、専門家にも大きな刺激をもたらすはずである。

さて、日本政治の研究者である評者が本書によって強く印象づけられたのは、同時代的な出来事についての評論を書くことの難しさである。評者もときおり日本政治に関する時論を発表することがあるため、本書の諸論考を書く際に著者が直面したであろう逡巡、煩悶やそれらを乗り越えるための決断を、共感をもって想起することができた。進行中の出来事について歴史的な意味づけや将来の展開などを分析し公表するのは、研究者にとって過酷なテストである。一般の人々がブログ等の手段で意見を公にすることが容易になった今、「大学の先生」だからといって陳腐な内容の文章を発表しているようでは相手にされない。読者が見過ごしていた事象や意味を照らし出すようなオリジナルな視点の見解を示さなくてはならず、しかも銜学趣味 (pedantry) に陥らないように意を尽くさなくてはならない。自分の分析とは全く異なった方向に現実の事態が進んだ場合には (評者も予想めいたことを言うのはできるだけ避けるようにしているものの、将来の方向性について言及せざるを得ないことが往々にしてある)、専門家としての沽券に関わるおそれがある。一方で予想が実現したとしても、後の世からは単なる偶然とみなされるかもしれない。

時論を単行本にまとめるのはさらに至難の業である。もしそれぞれの論考に論理の矛盾や現実との齟齬があっても、公表当初は必ずしも明らかになりにくい。しかしそれらをブックフォームで (再) 公刊したとたんに、そうした欠陥は一挙に露呈してしまい、辛辣な批判に晒されることになる (たとえそうした批判の多くが後知恵 (hindsight) に過ぎない

にしてもである)。時間の試練に耐えうる価値を持ちうる時論集の出版は相当な力量を必要とする仕事なのである。その点で、本書の各時論は現時点から見ても著者の慧眼が遺憾なく発揮されていると言ってよい。例えば、9・11直後の論考はテロと報復の間には悪循環があることを懸念しているが、未遂を含めてテロが後を絶たない現状は、著者の見通しの的確さを示している。米軍のイラク占領から間もない時期に力による民主化の限界を見抜いていた点や、ネオコン思想の全盛期にそれが近く影響力を失う可能性を指摘している点も同様である。

思うに、永続的な価値を持ちうる時事的評論が書けるかどうかは、堅固な歴史的視座を自家薬籠中のものにできているかどうかと深く関わっているようである。アドホックな感想にとどまらない優れた時論を生み出すためには、現在の事象を歴史的文脈の中に適切に位置づける能力が有益となる。丸山眞男や篠原一を挙げるまでもなく、多くの政治思想史家や政治史家が優れた政治評論を世に送り出してきたことは、歴史的視点が現代政治の分析に大きく貢献することを示している。この点で、アメリカ政治外交史家として著者が持つ歴史への感性の鋭さが本書を凡百の類書から際立たせていることは間違いない。アメリカが世界に対して持つ「主体意識」や占領に関する伝統が現在の同国の国際的行動を規定している点の分析などに、著者ならではの卓越した洞察力があらわれている。

それぞれの時代状況の中で書かれた文章に対して、著者自身が今の視点から振り返ってコメントを書いていることも本書の魅力である。当時の観察の有効性を確認したり、言い足りなかった点を補足する一方で、見通しが甘かった点については率直に反省の弁を述べている。例えば、自身が9・11事件を「犯罪」でなく「戦争」と直観的に理解したことに対して、アメリカの認識に同一化していたとして自戒の念を示している。グローバル化がテロの温床を生み出した側面を指摘した論考については、グローバル化が金融危機を招来する可能性を看過していたことを告白している。2006年中間選挙に際して、アメリカ政治の根本的方向は変わったとはいえないとの趣旨を述べていたことについても、オバマ大統領登場の背景を見過ごしていたとして反省している。こうした言葉は著者の知的誠実さをあらわすとともに、各論考を現在の文脈に置き直して再評価を行うことを通じて、本書の妥当性をいっそう高めることとなっている。

ところで、政治的な時論を公表する際の難しさは、それが一定の政治的立場との関わりを払拭しきれない点にもある。同時代的な政治的事件や状況に対して時論を公にする場合には、本人が意識しているかいないかにかかわらず、党派的な色彩を帯びざるをえないことを覚悟しなくてはならない。言い換えれば、特定の事件をどのように評価するかによって「踏み絵」を踏まされることになりかねないのである。その点で本書に特徴的なのは、アメリカ社会を覆う閉塞感を作り出したブッシュ政権に対する厳しい評価と、変化を掲げるオバマ政権に対する強い期待である。この清々しいまでの明快さには羨望すら覚える。しかし、アメリカ経済は危機からの脱出口がまだ明確になっていない一方で財政赤字は累積しているし、イラクとアフガンの情勢も不安定である。オバマ大統領はこの隘路を切り抜けることができるであろうか。著者とともに我々も刮目しておかねばならぬだろう。